

# 星 火 方 正

～燎原の火は<sup>ほうまさ</sup>方正から～



方正日本人公墓に向かって左隣に建立されている麻山地区日本人公墓  
黒龍江省麻山地区でソ連軍の挟撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山  
事件の被害者たちの墓。この公墓も1984年中国政府によって建立された。

### なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちが彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

### なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、国際的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

# 星火方正（第2号） ～燎原の火は方正から～

## 目次

方正訪問記 —「方正日本人公墓」と私—	南 誠・・・・・・・・・・ 1
北京での新年	今村 春江・・・・・・・・ 5
方正	伊藤 俊・・・・・・・・・・ 6
千葉県“方正郷”はいま	吉田 照也・・・・・・・・ 7
「満蒙開拓と伊那谷—慰霊碑は語る—」 の出版にかけた思い	寺沢 秀文・・・・・・・・ 10
《ニュース》 加藤紘一氏は方正日本人公墓に参拝していた！	・・・・・・・・・・ 12
4500 柱、公墓に眠る開拓民 「小泉首相もお参りを」	東京新聞・・・・・・・・ 13
日本政府に忘れられた中国の日本人公墓	華文週報・・・・・・・・ 14
60 周年特別番組「ポプラが語る日中の物語」	北京放送・・・・・・・・ 17
執筆者紹介とお願い	・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
方正地区日本人公墓 墓参の旅 案内	・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
お礼とご報告を兼ねて	・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
書籍のご案内	・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
編集後記	・・・・・・・・・・・・・・・・ 25



# 方正訪問記

—「方正日本人公墓」と私—

南 誠

まだ、10月末だというのに、中国東北地域は既に冬景色に染まっていた。見渡すかぎりの畑は雪に覆われていた。街の人は寒さに身を縮みながら、冬支度に励んでいた。

今回は麻山事件の生存者(老婦人)、高校の教師、カメラマンと私の四人旅であった。目的の一つは麻山事件のドキュメンタリーを作ることである。三泊四日という短い旅だったが、麻山事件の跡地(西大坂)、青竜村、方正などの地を訪ねた。



当時を語る

## 老婦人の涙のわけ

麻山事件の跡地を見つめながら、老婦人の目には涙が光っていた。その語り口調も悲しさのあまり、時には途切れたりする。なぜなら、彼女は60年前、この地で母親や妹、多くの知人を亡くしたからである。それを思い出しての涙だった。生き残った彼女は現地の人に拾われ、近くの青竜村のある家庭に養女として入った。そして、8年という長い年月を経て、迎えに来た父親と共に、ふるさとの北海道に帰還した。

彼女のような証人がいなくなったら、  
いったい誰がそれを教えてくれるだろうか？



涙を拭く

当時の悲惨さは彼女の言葉だけでは決して理解できない。涙がそれを物語っている。

今回の旅は彼女が歩んできた道を辿るものでもあった。しかし、その道は決して彼女の一人のものではない。かつての日本政府の国策の下で送出された満洲農業移民の多くが共有する経験でもある。私の祖母もその一人である。そういう理由もあって、私は彼女の話に一所懸命、耳を傾けて聞いて

ていた。しかし、あまりの話の悲惨さに、耳をそらしたくもなる。私の目には涙が浮かんできた。その後は感無量でしばらくの間、口を閉ざしていた。そして、老婦人の語りだけでは想像できない彼(女)らをもつ悲惨な体験を痛感した。

## 方正へ向かう

麻山事件の跡地を後にして、私たちは麻山事件でなくなった人たちの公墓のある方正へ向かった。今でこそ、高速道路が整備され、バスでの移動が可能で、便利になっている。しかし、敗戦時では、移動手段としての鉄道も橋も先に逃げた軍隊に破壊され、開拓団の人びとは徒歩で山道などを逃げ回っていた。そのために、幾人が死に至ったのだろうか。5時間ほどの道程をバスに揺られながら、窓の外の山々を見て、私は考え込んだ。

思えば、方正を訪問するのは三回目である。2004年7月末、「方正地区支援交流会」の奥村正雄氏が計画した「松田ちゑさんと行く方正墓参の旅」に参加して、方正を初めて訪れた。奥村正雄氏のことは松田ちゑさんのことを調べようとして、その紹介をお願いしたのがきっかけで知った。それが縁で、同会の再出発に際し、その活動に関わるようになった。



麻山地区日本人公墓

1984年、麻山地区日本人公墓が方正に立てられた。開拓団婦女子の遺骨500体あまりが合祀されている。



公墓を何周も歩く

老婦人は再会と別れを惜しむかのように、公墓を何週も歩き続けた。

## 「日本人公墓」の前で

冷たい風が強く吹いていたにもかかわらず、公墓の管理人は私たちを暖かく迎えた。鍵を開け、公墓の前まで案内してくれた。

初めて公墓を訪れる老婦人は、興奮する気持ちを抑えられずにいた。急ぐ足は若い私たちよりもはやい。そして、墓の前に供物を並び、墓参りを始めた。老婦人は目を閉じ、静かに拝んだ。その姿はかの地で無くなった親族や友らと心

の会話をしているようだった。

静寂の中から風の音だけが聞こえてくる。激しく揺れる樹の枝は老婦人を歓迎しているようだった。そして、その訪れが遅いといわんばかりに冷たい風が容赦なく体にあたる。老婦人は“待たせてごめんね”と独り言のように公墓に語りかけ、日本から持ってきた水をかけながら、周りを何周も歩き続けた。

麻山事件で亡くなった人らとの再会を惜しむかのように、老婦人は決して、公墓から去ろうとはしなかった。それでも、別れはやってくる。60年前のあの日のように。しかし、あの日はあまりにも突然すぎた。

墓参りを済まし、老婦人は静かに立った。管理人と握手し、公墓の案内に対する感謝の気持ちと共に、あの「戦争」で被害を被った中国の人々に謝罪する気持ちを述べた。



管理人と握手

「靖国参拝」の問題をよそに、今回の旅に出会う中国の方々には笑顔で私たちを迎えてくれた。これぞ、「民間」の力だ。

## 旅を終えて

方正を後にし、私たちはハルビンへ向かった。翌朝、老婦人ら三人は北海道へ帰っていった。私は他の地域へ旅立った。

あっという間の旅であった。旅の思い出の重みは時間の長さをはるかに超えている。その後、私はそれをどう消化していけばいいのかについて考え込んだ。しかし、その答えは決してすぐに出ない。おそらく、そのための旅は今後続く。それは公墓と出会った私にかせられた課題であり、満洲開拓民だった祖母を持つ私の宿命でもある。

彼(女)らは間違いなく、被害を被っている。しかし、中国の人にとって、彼(女)らは加害者でもあるのだ。矛盾しているようだが、この矛盾する気持ちは戦後の彼(女)らの多くを悩ませていたに違いない。老婦人が自らの体験を語りながらも、公墓の管理人に頭を下げたことからその姿がうかがえる。このような戦後の彼(女)らの心情を含めて、戦争体験であるといえよう。今回の旅を通して、それらが方正公墓に凝縮しているように感じた。

## 「日本人公墓」が記憶するもの

日中両国はかつての負の歴史の認識をめぐって、しばしば対立している。今の日中関係も「政冷経熱」から「政冷経涼」へと悪化しつつある。こういうときこそ、過去に目を向ける必要がある。その過去の記憶が凝縮している方正日本人公墓は、極めて重要な存在である。

公墓には人々に、かつての歴史について再考させる力をもっている。それは負の歴史に留まらず、公墓の建設を許可した寛大な中国側と、公墓の存在に無関心な日本側という対象的な姿をも含める。さらに重要なのはそこから国籍に関係なく、平和を祈願する人びとの姿を垣間見ることができるということだ。政治関係がどう変わっても、平和を祈願する人々の気持ちはいつまでも変わらない。国境を越えた連帯はこのようにして生まれてくる。それはかつての戦争への反省、永続する平和への第一歩である。

このようにして考えると、公墓は将来に向けた過去の記憶の場であるといえよう。その存在は何にも変えがたい役目を持っている。だからこそ、公墓をどう保存させていくかは大切である。また、公墓にまつわる様々な物語は語り続けていかなければならない。

今回の方正訪問はそのような公墓の大切さを再認識させてくれた。しかし、旅はまだ始まったばかりである。



方正日本人公墓

静かにたたずむ公墓は何も語ってくれない。その姿は語られていくのを待っているようだった。

《南誠（本名：梁雪江）さんは、残留三世として1976年黒龍江省樺南県で生まれ、1989年帰国。現在、京都大学大学院人間環境学研究科博士後期課程に在学し、日中関係史、歴史社会学を専攻。引揚げ問題及び中国残留日本人との関係、中国残留日本人の言説分析、当事者への聞き取りや中国帰国者コミュニティなどについて研究、残留日本人に関する多数の論文がある学究の徒だ。また、当会の理事でもある。》

## 北京での新年

今村 春江

新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願いします。

私は今、家族4世代で北京に来ています。1982年一家で日本に引越しをしてから、家族がそろっての中国は初めての事です。今回の北京旅行には一つ大きな目標がありました。それは、私の祖母に今の中国を見せる事です。

祖母は戦前開拓団の一員としてハルピン市の方正県に配属されました。敗戦後は残留婦人として1978年までに方正県で暮らしていました。私の記憶の中で1970年代の中国はまた物資が足りなく、生活は大変なものでした。食べ物が少なく、とうもろこしご飯や家の畑で取れた白菜、にんじん、茄子などの野菜が中心でした。冬は白菜の塩付けをそれぞれの家庭で作し、春まではそれを食べる続け、発酵食品に当たるため、栄養面ではかなり良いみたいです。今でも冬になると母が少し白菜を漬けて、みんなで食べています。そして、春節には必ずお魚料理が食卓に上がり、年年有裕という言葉にあやかり、毎年余裕のある生活をしようという願いを込めてのお魚料理や、春節に家畜の豚や家鴨などの料理があり、一年で一番美味しい料理が食べられる日とあって、小さい自分などは毎日が春節なら良いと考えていました。

春節の前には裁縫の得意な祖母が夜なべをして服を新調してくれました。そんな大変な30何年間に中国で暮らしていた祖母に今の中国を見せたくて北京に来ています。

祖母は北京の空港に到着してすぐに1978年の北京空港とは違い、明るいし、みんな笑顔があるとびっくりしていました。出迎えに来てくれた友人の車に乗り、北京市の新しく建設されたビル群、自動車の渋滞、市内のイルミネーション、道を行く人々の服装に圧倒され、ただ、ただびっくりして、車がそのまま夕食の予約をした東来順という老舗のしゃぶしゃぶ屋に到着し、歓迎光臨（いらっしゃいませ）とあちらこちらから声がして、個室に案内されて、あっという間に円卓が食材で埋まり、薄くスライスされた牛肉、羊肉、野菜などが並び、どれを食べても美味しいという祖母はかなりのカルチャーショックを受けている様子です。そして明日からの北京滞在に一抹の不安と期待を抱えている。中国を離れてからの20何年間の溝を埋めようとしています。

ビル群が林立し、百貨店が夜の10時まで開店し、商品が有り余っている今の中国を見た祖母はホテルに帰ってから、長生きして良かったと、中国がこんなに発展し、豊になって、昔とは全然違って、本当に自分の目で確認できたことが本当にうれしい。また、日中が友好であることが今回の旅行を可能にしたと話していました。

確かに中国は変わりました。度々中国に行く私などはあまりその変化について考えることはないが、今回、私も改めて中国が豊かになったと思う。来年のお正月は是非とも祖母に30何年暮らした第二の故郷方正県で新年を迎えたいと考えています。

## 方正

伊藤 俊（和光大学4年生）

ハルビンから北東へ車で3時間半、方正（ほうまさ）県の日本人公墓へ行くことになったのは急なことで、訪問日の二日前だった。ヤマザンこと山崎文徳くんが、方正で日本語学校の名譽塾長をしている王鳳山さんや役所の方に連絡を取って実現したのだ。

方正訪問の目的は日本人公墓を訪れることと、そこで王鳳山さんの話を聞くことだった。正直それ以外のことはよく分からず、「開拓団の人がたくさんいたんだろうな、残留孤児もたくさんいた所なんだろうな」くらいの認識しか持っていなかった。

実際に訪れた方正は「のどか」という言葉がよく似合う場所だった。車道を突然横切るアヒルの隊列、一本大きい道を外れると現れるでこぼこの道、そんな景色を通り過ぎて着いた「中日友好園林」ではまず、目的のひとつだった日本人公墓と対面した。

説明してくれた役所の李さんによると、方正県には敗戦時軍の食糧倉庫があり、たくさん<sup>\*1</sup>の開拓団の人々が集まってきた。しかし、その人々の中の5000人から6000人が収容所で寒さや伝染病、飢えによって亡くなったという。その人々が「方正地区日本人公墓」に埋葬されていた。

もうひとつ、「麻山地区日本人公墓」というものもあり、そこには麻山という別の地区の人々が埋葬されていた。その麻山での開拓団の最期を聞いてショックだった。500人の開拓民が撃ち合ったというのだ。最初は25人が475人を撃ち、次に5人が20人を撃ち…、というように。なぜそんなことをしてしまったのか、何にそこまで追い詰められてしまったのか、ということが僕には想像が及ばなかった。その後、残留孤児の人々が建てたという養父母の墓も訪れた。

さて、この友好園林の中は松林になっているのだけれど、なんとも心が和んだ。松は中国にもあるらしいのだが、日本を歩いているような気持ちになり、すがすがしかった。

次に訪れたのが資料館だ。そこには日中戦争の歴史から日本と中国・方正の交流、残留孤児・残留婦人の歩んできた道などの展示がされていた。

展示の中に剣玉やこけしといった日本独特のものがあつたので何だか懐かしかった。

僕が印象に残った展示のひとつの記事があつた。それは、朝日新聞埼玉版の記事で、そこには日本人公墓の成り立ちが書いてあり、そして「文化大革命の時も方正の人が公墓を守った」と書いてあって、「その時は古いものを壊すという風潮であつた」らしいのに守ってくれたということが嬉しかった。

最後に友公園林を出た所でスイカを一緒に食べたことも楽しい思い出として残っている。

日本語学校名譽塾長の王さん、校長、方正の役所の李さん、難しい言葉を一生懸命通訳してくれたチョウ君、多くの人の暖かさが嬉しかった。

日本を思ってくれる人が方正にいるということが分かったということだけでも、このスタディーツアーで得た収穫だと思う。方正の人々に何かを返したい。それは具体的には分からないけれど、歴史や中国のことについて学びつづけることしかないのかと思う。

<sup>\*1</sup> 開拓団とは「満州国」が建国された1932年以降、日本の農村などから土地を求めて満州国に渡った人々のこと。武装移民や彼らの花嫁として渡満した女性もいた。

## 千葉県“方正郷”はいま

千葉市周辺には方正出身の帰国者が多い。それには理由があった。その理由について、現在、東京地裁で進められている中国残留孤児国家賠償訴訟・千葉県原告団の代表者、吉田照夫さんに寄稿をお願いした。原稿は中国語、日本語どちらでも書きやすい言語で、とお願いしたら、すべて日本語で書いてくれた。(編集部)

吉田照也 (千葉市)

### ■ 「死んでしまいますよ」

60年前、私が中国人に引き取られた時、雪が降っていました。おそらく11月ごろだったと思います。中国人2人が収容所に来て、私に何か言っていました。私には何を言っているのかわからなくて、怖くて、「あんたたちと行かない」と言い張りました。回りのおばさんたちに「照也、中国人と行きなさい。行かないとここで死んでしまいますよ」と説得されて、仕方なくその中国人について行きました。中国人は2人で、1人は王青林さん、もう1人は熊世文さんで、最初は王青林さんに引き取られましたが、1週間くらいで熊世文さんに引き渡されました。熊さんの家に10日くらいいて、次には熊さんと親しい王殿財さんの家につれて行かれました。このように私は3回たらいまわしにされた後、この王殿財さんが養父になり私を育ててくれたわけです。

養父母に血のつながった子供はいませんでした。当時20代だった中国人の養女がいたほか、私が引き取られてあと、私のほかにも3人の姉弟(姉1人、弟2人)の日本人孤児が養父母に引き取られ、きょうだいとして一緒に育ちました。この姉は鶴子と言います。

### ■ 妻は永住帰国に反対

時が流れ、永住帰国を決意する時が来ました。妻は消極的でした。妻の両親、姉弟にも相談しましたが反対されました。反対の理由は日本での生活が容易ではないだろうから、ということです。まず私自身、日本語を忘れていた中でだれひとり日本語がわからず、そういう中で就職や日常生活上のさまざまな問題が出てくるだろう。中国なら自分たち親戚や友達もいて、何か困ったことがあれば相談できるが、日本では親身になってくれる親戚も少なく、友達も誰もおらず、しかも親戚に相談しようにも言葉が通じなくて相談できないではないか。さらには日本に行ったら自分たちが生活するのも大変で、再び中国に戻ろうと思っても戻ることすらできなくなるのではないかと、などなど心配していました。

私は妻に鶴子姉さんのところへ行こうと話しました。鶴子姉さんは中国語も日本語もできるし、困ったことがあったら相談もできるし面倒も見てくれるでしょう。このように説得して妻と親戚の理解をもらい、家族で永住帰国することを許してもらいました。養父母のもとで一緒に育った鶴子姉さんは同じ中国残留孤児・小島規さんと中国で結婚し、すでに1974年、日本に永住帰国、千葉県の八日市場に住んでいたのです。その関係で私たち家族も八日市場に住むことになりました。私の両親は

奄美大島から開拓団員として中国に渡ったのですが、私が千葉に永住帰国するようになったのはそうした経過によるものです。

## ■ 重労働、脳梗塞

八日市場に住むようになってから、私は鶴子姉さんの紹介で松田憲さんという方と知り合いになりました。松田さんは旧軍人で、戦争で両手をなくしていました。中国帰国者に同情して、とても優しい人でした。私が仕事が見つからず悩んでいる時、松田さんが来てくれて、悩むことはない、大丈夫と慰めてくれました。さらに「とりあえず私の工場で働かないか、仕事はきついし汚いが、やってみないか」と誘ってくれました。私は松田さんの鉄工所に勤めることにしました。

鉄工所での仕事は、重い鉄板を持ち運ぶ作業が多く、重労働でした。この重労働がたたってか、私は体を壊して軽い脳梗塞を起こし、半身不随のようになってしまいました。脳梗塞になってから3ヶ月くらい、通院治療を受けながら、鍼もやりました。そのうち病状が軽くなってきました。私が働けないために家族の生活が困窮していました。当時、私はまだ中国籍で、ある日、ビザの延長申請手続きのため千葉市の入管に行ったところ、係りの人が鹿児島から転勤で来たという人でした。同郷だということで親身に話を聞いてもらえました。私が体のことを話したところ、千葉県の中国帰国者生活指導員で通訳の大塚さんを紹介してもらいました。私は大塚先生の自宅へ行き話を聞いてもらったところ、「県の厚生課へ行って、あんたのことを話しておく」と言われました。そして1983年、今の住所である千葉市に転居し、生活保護も受給し、治療費の支給も受けることができました。

## ■ 方正の仲間が全国から

千葉市に転居してからまもなく、千葉市に住むボランティア団体の人々が私が中国から帰国したことを知り、私の苦勞に同情してくれたりして交流が始まりました。私はそれまでまったく日本語を学ぶ機会を与えられなかったため、日本語の聞き取りやしゃべることができませんでした。私はあらためて日本語を学ぶため、そして少しでも日本と中国の架け橋になろうと、毎日毎日、日本語の勉強をして、ようやく日本語が多少しゃべれるようになりました。

そのうちに、方正から日本各地に帰国していた人たちが私に連絡してくるようになりました。その人たちは山梨県、長野県、栃木県、鹿児島県、愛知県、群馬県、広島県などの田舎にそれぞれ定着した人々です。田舎は農業が多く、就職はとても難しいし給料も安い。それに日本語もわからなくて頼る人もいない。そんなことから、みんな私を頼って千葉県に集まってきました。ある人は帰国前に私に連絡して相談し、方正から直接、千葉に来て定着した人もいます。

千葉に移ってきた人たちには、まずアパートを探し、就職の斡旋、会社の面接の時はいつも通訳をかねて付き添い、それは現在もやっています。新しく中国からくる身元判明孤児の保証人、帰国手続き、2世3世の来日手続き、入国申請のために入国管理局への同行、みんな中国籍のまま来日するので、市、区役所へ同行して外人登録の手続き…。公営住宅の申請手続き、入居が決まれば保証人探しや自分で引き受け、公営住宅入居の説明会に同行もしょっちゅうです。日常的に多いのは子供たちが通う学校の連絡事項の伝達、病人を病院へ連れて行く、葬式の手配…。いまでも日本語が話せず、日常生活に支障をきたしている人が少なくなく、私のやらなければならない仕事は、いつ終わるとも知れません。

## ■ 王鳳山さんのこと

私がまだ方正にいる頃は、王鳳山さんとはただ面識があるだけでした。付き合いはなかったし、特に関係はありませんでした。親しく付き合うようになったのは今から10数年前、王鳳山さんが副知事として、方正県を代表し、2度ほど日本を訪問した時です。1回目の随行員は、当時、方正県外事弁公室の主任・王広臣さんと通訳の陳福堂さんでした。彼らが日本滞在中、私はずっと随伴していました。毎日いろんな話をし、お互いに理解する中で親しくなりました。彼らが中国に帰るときは私の長男が車を運転して成田空港まで送りました。時の流れは速く、あれからもう10数年たちました。今度再会する機会がきたら話したいことが山ほどあります。



“方正郷”の仲間たち 2006年4月1日 千葉市美浜区の桜の下で。  
左から王淑賢、甄国芳、張桂芝、孫德礼、李淑珍、朱永凤、焦玉賢、田文学、矯桂云、  
王喜（吉田照也さん）の皆さん

## 「満蒙開拓と伊那谷—慰霊碑は語る—」の出版にかけた想い

寺沢秀文（長野県）

かつて中国東北部に13年間だけ存在した幻の国「満州」。この満州に全国から約27万人余の開拓団等が渡満し、その中で最も多かったのが長野県であり、そして県内でも最も多かったのが私の住む飯田・下伊那地方を含む県南・伊那谷地区でした。言わば全国で最も多くの開拓団を送出したこの伊那谷だけに、戦後、満蒙開拓に係わる慰霊碑等が各地に建立されています。しかし、戦後60年を経る中で、元開拓団員等も高齢化が進み、こういった慰霊碑の維持管理等にも支障を来たしつつあり、山中に埋もれどこにあるかさえわからないようなものすらあります。私は戦後生まれですが、両親が元開拓団員であったこと等もあり、この郷土の歴史の証人でもある慰霊碑の建立経過、所在位置等についての記録を残しておく必要があると常々思い、2年ほど前から所属する飯田日中友好協会等から有志を募り、慰霊碑を一つ一つ現地調査してきました。その都度、線香を上げ手向けてきましたが、どの慰霊碑からも満州に人生を賭けた人々の思いが伝わってくるようでした。今般、伊那谷地区の27基に及ぶ慰霊碑等の調査結果を記録集としてまとめたのが標題の冊子です。400部を自費出版し、お陰様で関係各方面から多くの引き合いがあり、既に在庫がありません。このような満蒙開拓に係わる慰霊碑は全国各地にあり、出来ることならば各県単位等にて記録集等を作って頂いたらと思います。幸いなことに長野県においても、長野県開拓自興会にて提案したところ、早速全県事業として取り組んで頂き、伊那谷版に先んじて昨年春に全県版の記録集が県自興会より発行されています。

長野県開拓自興会では旧満州への訪問団の派遣、残留邦人調査、毎年秋実施の慰霊祭等の事業を行ってきており、私も歴史を語り継ぐ次世代の一人として役員末席に加えて頂き、お手伝いをさせて頂いています。一昨年(2004年)の秋には約100人の規模にて県自興会主催の友好訪中団を旧満州に派遣し、旧開拓地等を分散訪問等いたしました。その際、全団員にて方正公墓の墓参を企画したところ、反日気運が高まっていたこと等もあり、現地政府からの要請により全員での墓参事業を中止せざるを得ませんでした。あれだけの多くの日本人犠牲者を出した旧満州で公式に許された日本人公墓はたった1ヶ所しか無いということ、今でもそこへの自由な墓参が困難であること、そういった事実を日本人のどれだけの人が知っているのでしょうか？また、それだけのことをかつて日本がしてしまったという悲しい歴史の帰結でもあります。

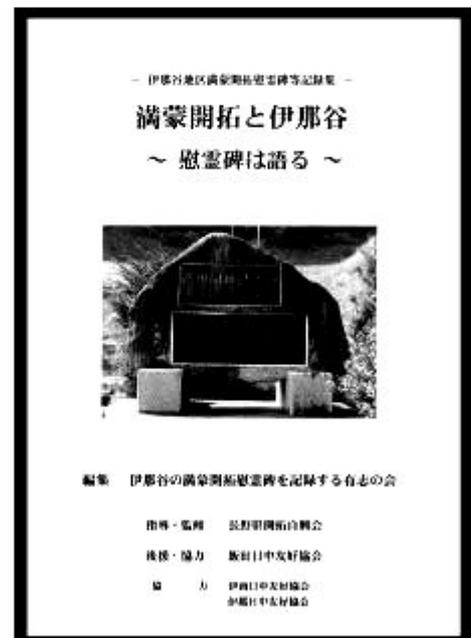
私自身も戦後世代ですが、私たち後継者に託された課題は戦争という「負の財産」を友好交流という「正の財産」に置き換えていくことだと思っています。私の近くの村に泰阜村という多くの開拓団を送出した山村があります。この泰阜村は分村開拓団の避難民たちが方正でお世話になったこと等の縁により方正県と友好締結し、児童が相互交流する等し

ており、これも負の財産から生まれた国際交流という正の財産です。また、私の両親もかつて住んだ吉林省の水曲柳開拓団の縁により、吉林省叙蘭市と飯田日中友好協会とが友好締結し、毎年募金を集め、現地の就学困難児童支援活動を行う等の交流が続いています。

私が所属する飯田日中友好協会では、昨年5月から「満蒙開拓・語り部の会」を発足させました。約40人の元開拓団員の皆さんに各地の学校や各種会合等にてその体験談を話してもらっています。息の詰まるような生々しい悲惨な体験を初めて語ってくれた方もいました。本当に戦争は日常では考えられない悲惨な出来事が沢山起こります。だからこそ戦争はいけないということを語り部の人たちは自らの体験から伝えてくれます。

満蒙開拓という悲惨な体験を語り継ぎ、戦争は2度といけないということを日本国内でももっと確認し合っていくべきだと思います。そして中国の青少年たちにとっても「憎しみ」だけを語り継ぎ増殖させていくのではなく、歴史の反省の下、本当の意味での明日を見た友好交流が実現できるよう、中国の青年たちとも理解を深めていくことが出来たらいいと思っています。

《寺沢秀文さんは、『伊那谷の満蒙開拓慰霊碑を記録保存する有志の会』代表であり、また長野県日中友好協会・副理事長、飯田日中友好協会・副理事長として日中好運動に文字通り東奔西走されている方である。また当会の理事でもある。》



左上写真は、伊那谷各地に建つ満蒙開拓慰霊碑の一つ。右上写真は、「伊那谷地区の満蒙開拓慰霊碑等記録集」の表紙。

## 加藤紘一氏の公墓参拝を確認！

1月27日、衆議院議員会館に加藤紘一氏を訪問した。当会の参与である木村直美が旧知の加藤氏のアポイントメントを取り、当会顧問の韓慶愈(社団法人 日中科学技術文化センター理事長)と大類が一緒に加藤氏を訪れた。

木村から、当会の設立経緯を紹介しその後、方正についてお聞きしたところ、次のようなことがわかった。

外務省に勤務していた1967、8年頃、加藤氏は香港に駐在されていた。国交回復前の日中間の往来は香港経由の頃である。その頃少ないながら、中国から帰国する残留婦人も香港経由で帰国していた。香港の日本領事館に勤務する加藤氏は、残留婦人から中国の事情を聞かれたところ、残留婦人の多くが方正県出身であることがわかった。加藤氏はその時、いずれ方正県を訪ねてみたいと思ったとのことである。

残留婦人たちが日本食を食べたいというので、日本人倶楽部にお連れして、納豆や味噌汁など懐かしい日本食を食べてもらい、中国でのいろいろな話を残留婦人たちから聞かれた。

「日本に夫がいたけど、帰るに帰れない、生きていくために中国の男性と結婚し子供ももうけました。私は悪い女でしょうか」、などと加藤氏に思いのたけを語られ、泣かれたこともあった。当時28歳頃の加藤氏は、「若いのに、年取った婦人たちを泣かせていて、まわりは変な風景だと思ったでしょうね」と回想された。

それから36年ほど経って、氏がちょうど浪人の身の2003年8月15日から20日にかけて、地元山形県の経済関係の訪中団団長として、方正を訪問することになった。その日程を詰めている段階で加藤氏は、方正県に日本人公墓があることを知ったとのことであった。方正県ではもちろん墓参し署名された。

当会の仲間が、署名簿に加藤氏の名前が記載されているのを知り、昨年確認をしたが、その時は訪問されてはいなかったと関係者から聞かされていた。しかし今回、ご本人の口から、日本人公墓に参拝されたことをはっきりと言われた。

戦後多くの政治家が訪中しているが、国政に携わる政治家が方正の日本人公墓まで行き参拝されたのは加藤紘一氏が初めてだ。 (大類)

# 4500柱、公墓に眠る開拓民

枯れ草をかき分けると、風化した無数の白骨が散乱していた。

一九六三年四月、中国東北部の黒龍江省ハルビン市方正県にある砲台山(ほうとうたい)山のふもと。中国人の夫とともに荒地を開墾していた松田ちよささん(82)には、それが何かすぐに分かった。

方正県では四五年から四六年にかけて、避難所で暮らしていた旧満州開拓団員とその家族約四千五百人が、帰国を望みながら、寒さと飢えの中で死んでいった。見つけたのは、その遺骨だった。

あの冬。山形県天童市から開拓団として満州に入植した松田さんは敗戦を知ると、家を捨て、六歳の娘を抱えて逃げ出した。侵攻してきたソ連軍や、「匪賊(ひそく)」と呼ばれた武装集団に襲われるのを恐れたからだ。日本人の夫は徴兵され、生死も分からなかった。

山を歩き分け、たどり着いたのは、方正県の別の開拓団の入植地跡。倉庫や民家を改造した何カ所もの避難所に、各地から集まった数十人の日本人が身を寄せた。畑に突った穀物は一方

## 「小泉首相もお参りを」



長男の崔鳳義さん夫婦に囲まれ、中国の日本人公墓を訪れた時の記憶をたどる松田ちよささん(中)。部内の自宅。

松田さんの唯一の望みは、生き延びて日本に帰ること。そのためには結婚して、避難所を出るしかなかった。「中国人の家にいきます」。避難所の部長に頼み込み、紹介された同い年の中国人男性と結婚した。翌年、長男の崔鳳義(さいほうぎ)さんが生まれたが、夫は六年後に事故死。生きるために三人目の夫と再婚した。

松田さんは中国に取り残された孤児たちに日本語を教え、親権しを手伝った。そのためか、六〇年代後半に始まった文化大革命では「日本のスパイ」と疑われ、三年半も投獄された。家族との手紙のやり取りすら許されず、いわれない「反省」を強いられる日々。密告したのは松田さんと同様、戦後、中国に残りざるを得なかった。

松田さんは中国に取り残された孤児たちに日本語を教え、親権しを手伝った。そのためか、六〇年代後半に始まった文化大革命では「日本のスパイ」と疑われ、三年半も投獄された。家族との手紙のやり取りすら許されず、いわれない「反省」を強いられる日々。密告したのは松田さんと同様、戦後、中国に残りざるを得なかった。



望郷の思いを抱きながら戦後亡くなった日本人4500人の遺骨を納めた日本人公墓(中国黒龍江省ハルビン市で、南松田さん撮影)

月で食べ尽くされ、冬を迎えた時には深刻な食糧不足に陥っていた。松田さんは、持っていたわずかなお金で、中国人が売りにきた食料を買って「私の命」と大事にしてきた娘に与えた。だが、間もなくそれも尽きた。子どもやお年寄りが毎日、何人も死んでいく。娘も冬を越せぬまま短い生涯を閉じた。「私も病気でね。娘が亡くなった時は立つことさえできませんでしたよ」

埋葬しようにも凍土は固く、遺体は凍ったまま積み上げられた。疫病の流行を恐れた地元政府は香になること、約四千五百の遺体を砲台山のふもとに運び、三つの山に分けて、ガソリンをかけて燃やした。炎は三日三晩続いたと

いう。松田さんの唯一の望みは、生き延びて日本に帰ること。そのためには結婚して、避難所を出るしかなかった。「中国人の家にいきます」。避難所の部長に頼み込み、紹介された同い年の中国人男性と結婚した。翌年、長男の崔鳳義(さいほうぎ)さんが生まれたが、夫は六年後に事故死。生きるために三人目の夫と再婚した。

松田さんは中国に取り残された孤児たちに日本語を教え、親権しを手伝った。そのためか、六〇年代後半に始まった文化大革命では「日本のスパイ」と疑われ、三年半も投獄された。家族との手紙のやり取りすら許されず、いわれない「反省」を強いられる日々。密告したのは松田さんと同様、戦後、中国に残りざるを得なかった。

この企画へのご感想、ご意見をお寄せください。電子メールはshakai@tokyo-np.co.jp 手紙は〒108 8010(住所不要) 東京新聞社会部 ファクスは03(3472)8147

## 記憶

### 戦後60年

### 新聞記者が受け継ぐ戦争

方正地区日本人公墓 1945年から46年にかけて、敗戦の混乱の中ですべてなくなった旧満州開拓団員ら約4500人のために建てられた中国で唯一の公墓。日中国交正常化に9年先立つ63年に仮遷葬が、64年に高さ3・3層の墓碑が建立され、地元政府が維持管理している。隣には集団自決した5300人の遺骨を納めた「麻山区日本人公墓」、残留孤児が建てた「中国難父母公墓」があり、周辺は中日友好園林として整備されている。

五族協和・王道楽土を理念として日本は一九三二年、現在の中国東北部に「満州国」を建国。傀儡(かいらい)政権を樹立させた。昭昭恐懼下にあった日本の農村の土地不足と人口過剰、満州の治安維持などを目的に、国策として進められた満州移民。だが敗戦後は混乱の地に取り残され、悲惨な逃避行の中で、多くの残留孤児、残留婦人を生む。その人々の戦後を追った。

### 満州棄民

社会部 林 涼子

# 華人週報

A 共60版  
2005年12月8日  
每週不曜日發行  
第264號  
甲戌12年12月5日星期三第3000號

華人週報  
CHINESE WEEKLY

平成12年12月5日第三種郵便物認可  
責任編輯：周 豐 美術編輯：周 豐

關西特寫 A33  
2005年12月8日

## 在華日本入公墓被日本政府遺忘

作為二戰後遺留問題之一的日本殘留孤兒問題，在中日兩國間並未引起社會的太大注意，然而作為一國歷史鏡子，卻能真實地折射出兩國人民和政府在這個問題上認識和處理上的差距。據長春市委宣傳部外事處副主任劉國君介紹，所謂的日本殘留孤兒和殘留婦女，完全是日本侵華戰爭的產物，幸而日本戰敗後因軍隊撤出而被迫留在中國大陸的日本孤兒和日本婦女這一特殊群體。據不完全統計，戰後日本遺留在中國的殘留孤兒約有5000人。自中日兩國1972年建交後，截止到2001年，除去自然死亡者外，陸續有2455名殘留孤兒被證明身份返回日本。目前仍留在中國國內的日本孤兒已寥寥無幾，其中包括部分因不適應日本生活重新回到中國的孤兒和因缺少有力證據證明身份而暫時滯留中國的孤兒。

### 長春有座日本孤兒養父母樓

在長春市南關區平陽街，有座紅磚砌成的三層居民樓，樓頂上樹立的“中日友好樓”幾個大字標明了它的特殊身份。這就是由日本友人為日本孤兒中國養父母建造的居民樓。從它的問世經過和裡面居民的口中，可瞭解到許多有關日本殘留孤兒和由此而產生出來的辛酸故事。

在日本戰敗後的混亂時代裡，日本政府對散居在中國東北各地的日本國民採取了一種“棄民”政策。許多日本孤兒流落街頭，因為有了中國母親超越民族、地域、國界的偉大人性和博大胸懷，他們強忍著戰爭給中國人民造成的巨大創傷和因此而產生的對日本軍國主義的仇恨，從街頭撿回大批日本棄兒，以乳汁和慈愛加以撫養，這才使數以千計的日本孤兒得以存活下來。居住在這裡的李淑賢老太太的遭遇就是一個典型例證。

今年已是81歲高齡的日本孤兒養母李淑賢老人於1943年與丈夫一起從山東來到日本人統治下的長春市。一天已經懷有數月身孕的她來到日本人居住區販賣雞蛋，正在她與日本一家庭主婦用手絹高談闊論時，一個警察模樣的人突然衝出院子對著她的腹部踢了一腳，她不僅沒了產而且從此失去了生育能力。然而就是這位本應對日本人懷有深仇大恨的中國婦女，在戰後不久的一天，當她隔窗看到一個洋車夫正為無法收養一個撿來的日本小女孩而發愁時，偉大母親衝動地做出重大決定，她讓丈夫抱回了這個身著日本黑色小和服的女孩。她決心把她當成親生闺女撫養。在李淑賢夫婦的精心撫養下，日本小

女孩不僅治好了病，而且有了一個好聽的中國名字：徐佳蘭。徐佳蘭有了一個與中國普通孩子相同的命運，她讀完高中，在工廠裡找到了正式工作，結了婚，生育了子女。然而正當徐佳蘭夫婦兩兩開始享受用甘苦換來的家庭之樂時，知道了自己身世的徐佳蘭同其他日本孤兒一樣，在1990年返回了日本，而且帶走了丈夫和子女。

李淑賢夫婦含辛茹苦，僅存在內心深處的養兒防老的願望落空了。李淑賢的丈夫在切念著佳蘭名字的思念聲中去世，而從兩年因患尿毒症臥病在床的李淑賢老人，只能靠孫媳和孫夫照顧。偶爾接到外孫女從日本打來的問候電話，成了李淑賢老人的最大安慰。

同住在中日友好樓內的日本孤兒養母張雲芳老太太的遭遇比之李淑賢更慘，她收養的是一個日本男孩，因其生性頑皮，中文說得又不好，沒少給他們夫婦帶來麻煩。為了給養子創造一個良好的成長環境，他們不惜捨棄多年創下的家業，搬遷其居。養子長大工作之後，也攜帶家屬回到了日本，而且是一去不復返，音訊皆無。留給中國養父母的多是無奈與遺憾。

不過，中國養父母收養日本孤兒的故事在日本流傳開後，也打動了一些日本友好人士的良心。他們以各種方式向中國養父母們表達了敬意和感激。一位叫做辻尚草的日本友人於1990年出資8000萬日圓，在長春市政府提供的土地上，為中國養父母們建造了這座中日友好樓，以改善他們的住房條件。該樓共32套兩室一廳住房，最初住有29對中國養父母，後由於年邁的養父母們逐漸去世和搬遷，現在只剩下7戶8位老人。

另外，家住吉林省洮河市的曲美雲老人與山東濰台李往華老人有著相同的遭遇。儘管從氣質、長相、徵象等直觀現象看，一眼就能辨別她很可能是日本人，加上她還保留有當時日本生身父母留給中國養父母的各種信物；而且儘管她在中國事業有成，在當地經營一規模不小的汽車修理廠，膝下兒孫滿堂，足可享受天倫之樂。但她卻始終離不開那始終沒有停止過，隨著年齡的增大，這種心情變得越發強烈。只是由於缺少直接證據，而她被養育的時間也不在日本政府設定的特定期限之內，因此她的日本孤兒身份至今未能證實。對此，她深表不滿，曲美雲說：“判明自己的日本人孤兒真實身份，尋找生身父母是我尋找故人尋親之舉，任何人都無權利奪我認親歸宗的權利。無論當年我們

是以何種身份來到中國，都是戰爭的產物。因此，日本政府不能以任何借口擺脫它應承擔的責任。”曲美雲表示，即便將來不能判明她的日本孤兒身份，或是判明了卻得不到日本政府承認，在有生之年，她也親自訪問日本，親眼看看從小就把她拋棄了的祖國。

### 世上絕無僅有的日本入公墓

方正縣是個僅有人口23萬人的小縣，位於黑龍江省哈爾濱市東南165公里處。這座小縣城的名氣，是因在該縣境內建有一座在世界上也是絕無僅有的，由受害國政府為戰爭發動國國難民修建的公墓。當年親自參與日本人公墓修建的原黑龍江省政府外事部門的趙喜慶先生詳細介紹了事情的由來。1962年，正值中國國內三年嚴重自然災害時期，黑龍江省政府突然接到方正縣政府發來的一份報告，報告稱，當地農民在開荒時，在方正縣城外的炮台山腳下，發現了大批白骨，足有數千具之多。經調查發現，這些白骨多為兒童和婦女的骨骸，屍骨集中埋葬，且埋葬的土層較淺。後經查閱歷史資料得知，戰爭期間，這塊地附近曾是日本一團拓團團部所在地。日本戰敗後，被日軍遺棄在附近地區的婦女和兒童紛紛向方正縣奔竄，準備逃往哈爾濱回日本國內，因長途跋涉，饑寒交迫，加上疾病流行，其中半數人死在了方正縣。當然其中也不乏自殺身亡者。

判明事情的原委後，黑龍江省政府向中央政府做了匯報，在周總理親自過問下，決定責成方正縣地方政府從人道主義的立場出發，對散落在周圍的日本人遺骨進行收集、集中掩埋。儘管當時中國國內災情嚴重、財政狀況十分緊張，黑龍江省政府依然撥款20萬人民幣巨款，在遺骨發現地附近修了一座日本入公墓，並從哈爾濱搬來的俄國人墓地中遷來一塊日本人墓地常見的尖頂柱形石碑樹立墓前。上述請哈爾濱市著名書法家書寫了碑文，上書：“一九四五年亡故方正地區日本入公墓一九六三年存立”。

趙喜慶說，當時為日本人修建公墓和樹碑，曾在機關內部和群眾間引起激烈爭論。正是在周總理和陳毅外長等中央領導的親自過問和指導下，在毛澤東主席提出的“著眼日本人民，對日本人民與一小撮軍國主義分子相區別”的戰略思想下統一了認識。實踐證明，修建日本入公墓意義重大。首先它是一部歷史教科書，真實記載了當年日本軍國主義發動的那場戰爭給包括日本人民在內的各國人民帶來的深重

災難。如果沒有侵華戰爭，就不會有那麼多日本無辜百姓被驅趕到中國來，也就不會有那麼多死難者和孤兒發生。因此修建日本入公墓，首要意義是對日本軍國主義罪行進行控訴，其次是向日本人民示好，中國政府和人民以自己的寬闊胸懷和人道主義之舉，向日本人民傳遞了這樣一個信息：中日兩國要做好朋友，永不再戰。

1970年，因公墓舊址將修建水庫，日本入公墓被遷移到了離舊址不遠的炮台山東側，面積也由原來的3000多平方米擴大到14000平方米。後來，相鄰的麻山日本入公墓也遷入其內（麻山日本入公墓規模較小，埋葬的是500多具戰後因無法贖回日本國內而自盡的日本開拓團團員的屍骨），日本入公墓也於1994年改名為中日友好園林。如今，中日友好園林內蒼翠鬱鬱，日本入贈送的櫻花樹點綴其間，樹林深處並列著兩座日本入公墓：方正日本入公墓和麻山日本入公墓。相隔不遠的地方有一座由日本孤兒出資建造的中國養父母公墓，還有一座為紀念在中國東北地區推廣水稻旱育稀植栽培技術而在中國獻身的日本友人藤原長作先生的陵墓。再有一座就是由日本一民間團體贈送的中日友好紀念碑。位於中日友好園林入口處的陳列室內陳列著大量照片和實物，向觀眾詳細介紹著日本侵華罪行和中日友好園林發展的由來。

如今，中日友好園林成為了向當地青少年進行愛國主義教育的基地，同時也成了中日友好的象徵和促進兩國人民進行友好交流的紐帶。儘管方正縣在中國國內名不見經傳，但她在日本卻名聲響亮。目前，包括回國的孤兒及其家屬，加上以各種名義在日本生活工作的方正縣人竟達4萬多人。每年慕名來方正參觀的日本團隊的30多個，約300人至400人。

為了把中日友好園林真正建成交方正縣對外交往的窗口，園林的規模還將進一步擴建，祭祀死去的親人是各國的人之常情。為了達到不忘歷史、共同面向未來的目的，希望能有更多的日本人前來方正縣參觀訪問。透過參觀瞭解方正縣，也瞭解那段被遺忘的歷史。

令人不可思議的是，每年都穿著多環項飾神社的小泉首相，到埋葬著大批日本難民屍骨的方正縣日本入公墓不聞不問，也沒有一個日本政治家前來參拜。這難道不反映出日本政治領導人對待歷史問題一樣，繼續對昔日的“棄民”採取著無視和冷漠的態度嗎？（文/陳志江）

# 日本政府に忘れられた中国の日本人公墓

## 華人週報（翻訳）

方正県は黒龍江省ハルピン市の東南165キロのところであり、人口わずか23万人の小さな県である。この中心、方正の街が有名なのは、この街に建設された世界でも類のない公墓によってである。それは戦争の被害を受けた国の政府が侵略国自身の犠牲者のために建設したものである。当時、みずから日本人公墓の建設に関わった元黒龍江省政府外事部門の趙喜晨先生が、その由来を詳しく説明してくれた。

1962年、まさに中国が3年続きの厳しい自然災害に見舞われた時、黒龍江省政府は突然、方正県政府からの報告を受け取った。それによれば現地の農民が開墾中、方正県郊外の砲台山の山麓で大量の白骨を発見した、その数、数千にのぼる、というものだった。調査によって、この白骨はほとんど子供と女性のものであり、まとめて浅い地中に埋められていることがわかった。史料によれば戦時、このあたりは日本のある開拓団の本部があったところで、敗戦時、日本軍に遺棄された女性や子供たちが続々と方正県に集まり、ハルピンで日本へ引き揚げようとした。しかし長い逃亡と寒さ、飢餓がこもごも襲い、さらに疫病が流行、半数は方正県で死亡した。当然ながらその中には自殺者も少なくなかった。この顛末を知った黒龍江省政府は中央政府に報告、周総理みずからの決意によって、方正県政府が人道主義の立場から、周囲に散乱する日本人の遺骨を集め、まとめて埋葬することに決めた。当時、中国は災害が重なり財政状況も厳しかったが、黒龍江省政府は20万元の巨費を投じ、遺骨が発見された近くに日本人公墓を建設、ハルピンのロシア人墓地に捨てられていた、日本人墓地によく見られる、先のとがった石柱の石碑を選び、墓前に建てた。そしてハルピン市の著名な書家に頼んで、「1945年方正地区で亡くなった日本人公墓、1963年建立」という碑文を書いてもらった。当時、日本人のために公墓や墓碑を作ることに、役所の中や民衆の間で激しい議論が行われた、と趙喜晨さんは言う。ほかでもない、周総理および陳毅外相など中央指導部が直接かかわり、直接指導したこと、そして毛沢東主席の「日本人民に着目し、日本人民と一握りの軍国主義分子を区別する」という戦略思想のもと、日本人公墓を建設することの意義が極めて大きいことを、実践が証明した。まずそれは歴史教科書が、あの時代、日本軍国主義が起こした戦争が、日本人民を含む各国人民にもたらした巨大な災難をリアルに記載し、もしも中国侵略戦争がなかったら、これだけ多くの罪のない日本の庶民が駆り立てられて中国に来て、このように多くの死者や孤児を生み出すことはなかった、という真実を記載した。そのため日本人公墓の建設の最も大きな意義はまず日本の軍国主義が侵した罪を訴えたことであり、次に日本の人民に対して、中国政府と人民が広い度量とヒューマニズムに基づいて「中日両国はよき隣人として、永久に二度と戦わない」ことを伝えたことである。

1970年、昔の日本人公墓はダムを建設するために、そこからそれほど遠くない砲台山麓に移された。面積も元の3000平方メートルから14000平方メートルと広くなった。その後、麻山日本人公墓もその中に移された（麻山日本人公墓の規模はわりと小さく、日本へ帰ることができなくて自殺した開拓団員の500余の遺骨が埋葬されている）。

日本人公墓は1994年に中日友好園林と改名された。いま中日友好園林には松や柏が林立し、日本人が贈った桜の木がその間を点綴している。

林の奥まったところに2基の日本人公墓が並ぶ。方正日本人公墓と麻山日本人公墓だ。そこからあまり離れていないところに、日本人孤児がお金を出して建てた中国養父母公墓がある。さらにもう一基、中国東北地区で水稻の早期育苗栽培技術で中国に貢献した日本の友人藤原長作先生のお墓がある。そしてもう1基は日本のある民間団体が寄贈した中日友好記念碑。中日友好園林の入り口にある陳列室にはたくさんの写真や実物が陳列されており、見学者に日本軍の侵略犯罪と中日友好園林の発展の由来を詳しく説明している。

いま、中日友好園林は当地の青少年のための愛国主義教育の基地になっており、同時にまた中日友好の象徴になっており、さらに両国人民が友好交流を進めるための架け橋になっている。方正県は中国でこそあまり知られていないが、日本では名声が知れ渡っている。現在、日本に帰国した孤児やその家族を含め、さまざまな名目で日本で仕事をしたり生活している方正県人は4万あまりに達する。毎年方正県の名前を聞いて見学に訪れる日本の団体は30あまり、300人から400人に及んでいる。中日友好園林を真に方正県の対外交流の窓口にするために、園林の規模をさらに拡大する。亡くなった身内をお祭りするのは、それぞれの国の人にとって人情である。歴史を忘れず、ともに未来の目的に向かってさらに多くの日本人が方正を訪れ、見学を通して方正県を理解し、あの忘れることのできない歴史を理解していただきたい。

奇妙なのは、毎年、鳴り物入りで靖国神社を参拝する小泉首相が、多くの日本人難民の遺骨が埋葬されている方正県日本人公墓に対して知らぬ顔を決め込んでいることであり、一人の政治家も参拝していないことである。まさかこれは日本の政治指導者が歴史問題に対するのと同様、昔日の「棄民」に対して無視、もしくは冷淡な態度をとっているのではあるまい！？

(文・陳志江 翻訳・奥村正雄)

《この記事の前半は、長春にある日本人孤児養父母楼について書かれていますが、頁数の関係もあり訳しませんでした。後半の公墓のみ訳しました。この中の最後の方に「一人の政治家も参拝していない」とあるが、P12にあるように加藤紘一氏が参拝していることがわかったので参照してください。ちなみに、前半の要旨は次のようなものです。

「長春市に赤いレンガ造りの3階建ての建物がある。これは孤児たちが日本に帰った後日本人孤児を育ててくれた養父母の老後の生活が困難な状況を知った日本人・笠貫尚章さんが彼らの老後のために、1990年、長春市政府が提供した土地に、8,000万円を投じて建てたものである。」

# 北京放送が方正日本人公墓を取材し放送！

## 60周年特別番組

### 「ポプラが語る日中の物語」

会報1号で、北京放送（日本語放送）が昨年8月15日と16日に特別番組として、日本人公墓を取り上げて放送したこと、私（大類）にも北京から取材があったことを紹介した。その後、北京放送の王丹丹さんから、その時の録音テープ、また放送台本も送付していただいた。

わかったことは、戦後60年、中国からいえば反ファシズム闘争勝利60年という節目の年に、現在政治的に悪化している日中関係をなんとか好転したいという、北京放送の熱い試みが3回の特集番組として放送され、その一つがこの番組だということであった。

第1回目が8月8日放送の『忘れがたき傷跡』、8月15日が日本人公墓を取り上げたこの『ポプラが語る日中の物語』である。翌日も放送されたとのことであったが、これは再放送であった。第3回目が『日中の新しいスタートは今から』という内容である。

3回の特集番組は、日中関係の過去、現在、未来を見つめて、新しい友好的な日中関係を創造しようというものだった。放送時間はそれぞれ35分間である。公墓に直接触れていないところは、ページ数の関係で省略した。

取材前後にも、王丹丹さん、部長の傅頌さんとは電話で話したが、中国の若者もこの日本人公墓のことはほとんど知らないという。こういう公墓の存在を、両国の若者が知ることによって日中の絆を強くしていくことが出来るのである、と王さんたちと意見の一致を見て我々の活動の意義を確認できたことは嬉しいことだった。

さて番組は、重々しいテーマ音楽の後に、男性の声で次のようなナレーションが入り始まった。

（大類）

「第2次世界大戦の痛手から、60年の月日が過ぎました。33年前に中日両国は国交正常化を実現し、世々代々平和友好を誓い合いました。

反ファシズム戦争勝利60周年シリーズ番組『末永く世の平和を目指して』」

王：毎年8月15日は、日本、中国と韓国及び多くのアジアの国にとっては、特別の日です。中国国際放送局日本語部は、この記念すべき日をテーマに、三回にわたって特別番組をお届けしていますが、今日はその第二弾として、「ポプラが語る日中の物語」をお届けします。今日のスタジオには、特別ゲストとして元文化次官で、今は中国対外文化交流協会の副会長を勤める劉徳有さんをお招きしました。

王、会長、お忙しいところをよくいらっしゃいました。

劉：今晚は、劉徳有です。

王：劉会長は、1972年に第一陣の日本駐在中国人記者として日本にいかれ、その後15年間ほど日本で仕事をされ、日本通として知られていますね。

劉：いやいや、日本通はちょっと恐縮ですね。ま、日本語でしゃべるのは苦手ですけども、どうぞよろしくお願いします。

王：とんでもない。こちらこそ。ところで、今から60年前の1945年8月15日のことを、会長はまだ覚えていらっしゃいますか。

劉：ええ、まだ覚えています。日本の敗戦を私は大連で迎えました。その大連というのは、当時日本の植民地で、私はちょうど14歳の年でした。中学の二年生で、その頃勤労奉仕というのがございまして、その一環として、大連の海辺、星が浦というところの近くの山沿いで、ちゃちな戦車壕を掘らされておりました。8月15日の正午ですけれども、近くの小学校に皆集められて、いわゆる重大ニュースを聞かされました。スピーカーからはがーがーという雑音しか聞こえず、で、工事現場に戻ったところで、お茶汲みに行っていた旧友の口から、日本がポツダム宣言を受諾して、無条件降伏をしたことを初めて知りました。

ご承知のように、その頃、日本の植民地主義者は大連でひどい支配をしておりまして、一般の中国の民衆が大変苦しい生活を強いられていましたね。したがって、日本が無条件降伏したということで、私はそれこそ心の中で快哉を叫んだわけです。しかし、顔には出ませんでした。なぜなら、日本がまだ武装解除されていなかったからです。いやな勤労奉仕はそれで終わって、それから、学校に行くのをやめました。終戦になって、私の気持ちの大きな変化って言えば、日本と日本語に対する私の気持ちですけれども、ただ感情的に日本はもう戦争には負けたんだ、日本はもう国が滅びたんだと、これからもう二度と日本語を話さない、いやむしろ、話してやるもんかそういうような気持ちが強かったですね。

しかし、その気持ちはだんだんと変わっていきました。それは非常に幼稚な考えだとわかりました。なぜなら、戦後、日本の国民は、やはり生活の改善、民主主義、平和を求めて奮闘しておられることがだんだん分かってきました。それと同時に、やはり、毛沢東主席と周総理が中国の人たちにいろいろ教育してくださったからです。と申しますのは、私はそれまでそういう気持ちを持っていたんですけれども、日本の敗戦後、やはり感情の切り換えというのが必要だったんですね。それを切り換えてくれたのは毛主席と周総理です。それはつまり、早くから中国の民衆に対して、広範な日本の国民、それと一握りの軍国主義者を、やはり厳格的に区別しなければいけないと繰り返し繰り返し、忍耐強く中国の人民に対して教育したからです。私もその教育を受けて、だんだんと、まあ、正しく日本に対処するのが分かり、50数年前から、対日関係の仕事、つまり日中友好の仕事に携わるようになりました。

王：そうですか。大変貴重なお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

劉：いえ、いえ。で、実を言うと、日本の一般国民は中国人と同じで、あの戦争で大きな犠牲を払っております。特に戦争初期、日本政府にそそのかされ、開拓団として中国の東北にやってきた日本人たちは、敗戦に伴い、日本に戻ろうとしても戻れず、結局は中国で多くの方が死んでしまいました。いわば日本の一般の大衆も、あの忌まわしい戦争の犠牲者だったわけですね。

王：それは気の毒ですね。ほんとうに。しかし、これら日本人のために、中国政府は1963年に特別の墓地を作りました。この墓地は、開拓団民の最も多かったという黒龍江省のハルビン市に近い方正県にありますね。

劉：ええ、この墓地の正式な名前は「方正県日本人公墓」と言いまして、中国で唯一の日本人公墓として、周恩来元首相の配慮の下にその設置が許可されたものと聞いています。文化大革命では破壊から免れ、現在でも地元の人々によって保護されていると聞いております。

王：実はこの間、私たちはこの公墓を訪れました。公墓を囲んでいるポプラの木の下で、この35年来、両国の人々の往来と友好についてのストーリーを聞きました。それでは、現場に移りましょう。

(効果1. 風の音、ポプラの木の音)

マイクレポート1:「ここが中国唯一の日本人公墓、方正県日本人公墓です。1995年『中日友好園林』と改名され、ここには公墓のほか、記念館や、平和友好記念碑など九つの建物があります。敷地面積はおよそ1500平方メートルで、中には、木々が茂っており、緑で一杯です。1963年の設置の日に公墓の周りはポプラの樹が植えられ、今では大木となっています。風に吹かれて音を出すポプラの木々は、私たちに何かを語っているようです。」

(効果2. 木の葉っぱの音、風音)

マイクレポート2:「公墓まで案内してくれた方正県外事弁公室の王徳君主任は、まず公墓内にある記念物を紹介してくれました。」

(効果3. 王主任の話)

「東西の軸に沿って建っているのはすべてが日本の友好団体によるものです。これは山梨県が建てた中日友好往来記念碑で、その上に刻まれた八つの文字は山梨県知事の書です。これが植樹記念物で、隣が平和友好記念碑、その西の向こうにある大きいのが日中友好世界平和記念物です。その東サイドにハルビン市の「市の花」ライラックが植えてあり、西側には、日本の国花である桜が植えてあります。そのうちの5本は60年代日本から贈られたもので、今ではかなり大きくなっていますね。」

マイクレポート3:「また、公墓のこれまでのいきさつについて、王主任は次のように語ってくれました。」

(効果4. 王主任の話)

「日本が敗戦した1945年、方正県にいた開拓団員は多くが3カ所に集まっていた。その多くがハルビンに近かったので、人々は早くから敗戦の知らせを知り、敗退して来た日本軍と共に引き上げてきましたが、方正県の東にある樺林などいくつかの県にいた日本人は、敗戦の知らせを耳にするのが遅れ、日本軍との撤退には間に合わなかったらしいのです。彼らは中国人に恨まれているのを知っていましたから、大きな道を通って引き上げたりはしません。険しい山の小道をたどって大連に向かおうとしました。彼らが方正県に着いたのは10月の半ば頃で、ここは北国ですから初冬でも、かなり寒くなっていました。もと方正県にいた開拓団員はすでに引き上げていましたので、あとから着いたこれらの人たちおよそ1万5000人は、方正県開拓団の本部だった村に泊っていました。そして寒さ、餓え、病と、自殺などで死んでいったのは約5000人で、残る1万人のおよそ半数は女性と子供たちで、特に幼い子供は地元の人に收容され、のちに多くの人が中国政府によって日本に送還されました。こんなことがあって、方正県に残った日本人は4000人以上もいました。」

(効果5. 王主任の話)

「1962年、山を切り開いていた村人たちは多くの遺骨を発見しました。地元に残った日本人の話によりますと、これら遺骨は引き上げる途中倒れた日本人のものです。これら日本人は罪なき人だったので、死者たちの墓地を作ってほしいという願いは、1963年の5月、周恩来首相の特別許可で叶いました。その翌年に始まった文化大革命でも(大類注:こう放送したが、文革は1966年に始まった)、公墓は地元の人々からしっかり守られ、少しも被害を受けなかったのです。」

(効果6. 王主任の話)

「ところで今、中日関係は政治的には下火となっていますが、どんなことがあろうと、私たち方正県の人々は、この公墓をしっかりと守っていきます。」

劉:敗戦から18年後、これらの犠牲者の霊は初めて浮かばれましたが、この公墓のことはあまり両国の人々に知られていないようです。王さんはこの話をどこからキャッチされたのですか。

王：実は、私はつい最近インターネットで偶然に知りました。同時に、日本には、本部を東京に置く「ハルビン市方正地区支援交流の会」があることも知りました。この方正県日本人公墓のことについて、この会の事務局の大類善啓（おおい・よしひろ）さんは電話で次のように語っています。

（効果7. 大類さんの話）

大類：「1987年か88年頃だと思います。『ハルビン市方正地区支援交流の会』ということで方正県に行きました。こういうところに立派なお墓が建っている。それを見ることができたんです。そういう意味で、日本が逆の立場だったら、本当に（敵対する人々の墓を建てること）こういう事をやっただろうかと思いましたね。そういう意味では、非常に印象深い旅でした。

この方正県日本人公墓については、個人的に会う人に知らせることをしていましたけども、多くの人たちはハルビン市は知っているけども、方正という田舎は知らないわけですよ。まして、中国に日本人公墓があるということは知らない。それですね、私たちは多くの人たちに日本人公墓の存在をより知ってもらおうと、『風雪に耐えた中国の日本人公墓、ハルビン市方正県物語』という本を出したんです。

例えば、かつて、北京に駐在したジャーナリストとか、非常に中国通だと言われる人たちも日本人公墓があるということを知らなかったんです。これはやはりもっと知らせるべきだ、現在のように政治的には決していい関係じゃないですね、そういう状況の中でね、この日本人公墓を、それも開拓民、その人たちも結果的には日本の国家の犠牲者なんだけども、そういう人たちのお墓を1963年という、日中国交回復前の段階に作った中国政府と中国人民のその寛大な気持ちをね、僕はこの日本人公墓が表していると思うんですね。

やはり、この日本人公墓を日本人に知ってもらうこと、特にこういう時代だからこそ、みんなに知ってもらいたい。特に日本の政治家とかね、こういうことがあるんだよということを知ってもらいたいなと思っているんです。「方正友好交流の会」は始まったばかりなんですけれども、ぜひ私たちの活動を理解して頂いて、いろいろと会員になって頂きたいとか、いろんな形で支援していただければ嬉しいですね。」

劉：「ハルビン市方正地区支援交流の会」の方々、本当にご苦労さまでした。

王：方正県日本人公墓ができてから42年も経ちましたが、いまでは当時の若者もすっかりお年寄りになってしまいます。また十数年前には、公墓の隣に、日本残留孤児の養父母たちの墓碑が建てられました。ここには戦後中国に残された日本の子供たちを育てた中国人の養父母たちが眠っています。私たちが公墓を訪れた日に、暫く前亡くなった「石ママ」と親しまれていた方のお葬式が行われていました。

（ここから、石ママと呼ばれた女性残留孤児の話になる。しかし、日本人公墓については直接触れないので、この部分は省略する）

王：黒龍江省ハルビン市付近の方正県にある日本人公墓「中日友好園林」とそれに関わる残留孤児のストーリーでした。ではまたスタジオに戻ります。今日のゲストは、元文化次官で、中国対外文化交流協会の劉徳有副会長です。

劉：はい。さきほど、とてもいい話を聞かせてもらいましたね。本当に感動しました。中国では昔から、「寛大な心を持つ」ことが美德とされています。方正県日本人公墓はまさに

この美德を表していると思います。良いことをやればいつか必ず報われるといわれていますが、方正県の人々と日本の人々とのつながりは切っても切れないものですね。

王：その通りです。1980年、ある日本の方は方正県の日本人公墓を見学した後、中国人の心構えに感動され、中国のために私も何かをやりようと思い、方正県での稲の栽培を無償で指導することを決心しました。そのご指導の下に、方正県をはじめ、黒龍江省の稲の収穫は倍以上に増え、その後、この栽培技術は中国のチベットと台湾を除く全ての省や自治区に普及しました。

中国の稲の栽培に大きく貢献したこの人が、藤原長作先生です。藤原長作先生は1998年の8月17日になくなりましたが、今でも先生のことを方正県の県民は忘れてはいません。先生の遺志に従い、その遺骨の半分は中国に送られ、日本人公墓のある「中日友好園林」に安置されています。

方正県政府は藤原長作先生のために墓碑を作りました。この墓碑をデザインした外事弁公室の王主任は次のように紹介してくれました。

#### (効果19. 王さんの話)

「墓碑の上端にある稲の模様は、藤原先生が一生をかけて従事した稲の栽培を意味します。この墓碑の高さが2.72メートルなのは、先生が初めて方正県でテスト用として耕した農地の面積を意味し、墓碑の下部の長さ87センチの台は、先生が87歳まで生きられたことを象徴しています。そして、墓碑を囲む7本の欄干は、先生が稲の栽培を指導するため方正県を7回訪れたことを表しているのです。」

#### (効果20. 王さんの話)

「最も印象深いのは、『私は戦争には参加してはいませんが、私自身の行動で日本の戦争で犯した罪を償いたいのです』、『私は共産党員ではありませんが、カナダのベージュンのごことはよく知っていますよ』という先生の言葉ですよ。」

王：1963年5月に方正県日本人公墓ができて以来、戦争の犠牲者となった日本の開拓団民、日本人残留孤児を育てた中国人の養父母、そして中国の稲栽培に貢献した日本人の藤原長作先生など、日本人だけでなく中国人も同じ中日友好園林に眠っています。この点はまだ多くの人々には知られてはいないかもしれませんが、園内のポプラ、柏、ライラックと桜などは、数十年来、この中日の物語を静かに見守ってきたのです。

#### (効果21. 音楽—土琵琶)

王：さて、番組の最後に、今日の特別ゲストである中国対外文化交流協会の劉徳有副会長のご感想をお聞きください。

劉：え、王さんからは大変感動的な話をお伺いました。問題はこれからの中日友好関係をどうするかということだと思いますけれども、今後の中日友好関係を考える時、私は何よりも、相互理解と相互信頼を強めることが非常に重要であるというふうに考えます。それにはまず第一に、人的往来、これをもっともっと盛んにする必要があるんじゃないかと思えます。で、第二点は、文化交流、これをもっと強化する必要があると思えます。文化交流というのは、いわば、心と心の交流でございまして、やはり、この心と心に橋をかけるプロジェクトというふうに私は理解しています。その橋の名前は友好の橋であり、相互理解の橋であると思えます。で、今後この橋を渡る行き交う人がますます多くなることは私は非常に強く希望しております。第三点は、何でも話せる、つまり、本音で語り合える仲になる、友人になるということが大事じゃないかと思えます。

そういう本音で語り合える友人のことを中国では『そう友』と言います。『そう』は言辺に『争』、それから友達の子、この言辺に争うのが諍いと読みますけれども、そういう意味じゃなくて、本当になんでも話せる友人のことを『そう友』と言うんです。中日両国人民はやはりそういう友人であってほしいと思えます。

それから、中日両国の未来について、私の考えをちょっと述べてみたいと思いますけれども、中日両国の人民はやはり世代代に亘って、孫子の代まで友好的に付き合うことが非常に大事だというふうに考えます。なぜなら、中日両国はアジアにおける二つの非常に重要な国でございます。で、この二つの国が友好的に付き合うということはただ両国の利益になるだけじゃなくて、アジアと世界の平和につながるからでございます。中日両国に必要なのは、いうまでもなく、友好、協力、平和であって、対立、反目、敵対ではないと思います。で、いま改革開放を進めている中国にとって必要なのは、ほかでもなく、自国の社会の安定と周辺の平和と安寧でございます。お隣の日本も戦後歩んできた平和発展の道を今後も歩み続けるよう私は切に望んでおります。

(効果 2 2. エンディング音楽)

## 執筆者紹介

記事の構成上、紹介できなかった執筆者のプロフィールを、簡単ですが紹介します。なお、文中で執筆者のプロフィールがわかる人は省略しました。

今村春江さん：

「北京での新年」の執筆者。1971年方正生まれの方正育ち、35歳。11歳の時に来日。春江さんの祖母（前号で収録しましたが、読売新聞が彼女のことを大きく紹介しました。05年7月7日付け夕刊）は現在85歳、開拓団の一員として両親と兄弟で方正県に入りました。戦後、祖母は残留婦人として方正県に残り、1978年に日本に戻りました。

春江さんは日本に帰国後、天津の南開大学に留学。現在、旅行社に勤務。一児の母であり、また当会の理事でもあります。

伊藤 俊さん：

「方正」の執筆者。1983年生まれ。現在、和光大学の4年生です。今年の夏、アジア諸国との友好を願う10代、20代の若者たちが、単なる旅ではなく、歴史を学ぶという問題意識をもって、中国東北への旅を10人ほどで行いました。伊藤さんはその一人です。

## ご支援ご協力をお願い

当会の活動に賛同される方、関心をお持ちの方々のご入会をお待ちしています。  
年会費：個人会員 一口 1,000円 団体法人会員 一口 10,000円  
口数は最低一口、上限はありません。よろしく願いいたします。

## 方正日本人公墓 墓参の旅

6月中旬に公墓を訪れる旅を企画しています。墓参だけでなく、60年前、多くの同胞が各地の開拓団から命からがら方正にたどり着いた時の収用施設跡の見学や地元の人たちとの懇談など、方正公墓の意味を問い直す、当会ならではのメニューも考えたいと思っています。

日時、費用などが決まったら改めてお知らせしますが、20名から25名ほどですと、12万円から14万円ほどの旅費がかかるものと思います。参加希望のある方、今の段階でははっきりしないが検討する材料として、詳しい日程案のほし方、前もって知らせていただければ幸いです。よろしく申し上げます。

日時	訪問地	交通機関	活動内容	宿泊地
1	成田空港  ハルビン市	中国国際航空 国内線	成田空港集合 北京からハルビンへ ハルビン外事室と懇談会・晩餐会	ハルビン市
2	方正県	専用バス	ハルビンから方正へ移動 方正県政府と懇談会・晩餐会	方正県
3	方正県	専用バス	方正地区日本人公墓参拝 麻山地区日本人公墓参拝	方正県
4	方正県	専用バス	方正県からハルビン市へ移動 市内観光・ショッピング	ハルビン市
5	ハルビン市	専用バス	市内内観光・ショッピング	ハルビン市
6	北京/成田	国内線 国際線	内線にて北京へ移動 北京より一行成田空港へ	

旅費一名様/¥120,000～140,000. -

## お礼とご報告を兼ねて

昨年の6月、再編総会を経て会報第1号を出した後、いろいろな方々に会員になっていただきました。また、カンパもお寄せいただきました。本当にありがとうございました。本来ならお一人お一人にお礼のご挨拶をしなければならないところですが、みなさまのお名前を以下に記して感謝の意に代えます。何卒ご了承ください。(敬称略、受付けた順に記載しました。06年2月20日現在です)

石井愛輝 中島紀子 駒ヶ嶺法子 菅原康子 斉藤兵一 野口武 石原健一 魚崎宏 溝呂木勇  
北澤博史 王元怡 杉田春恵 石橋実 阿部恵一 平方明男 橋沢仁 山村文子 田村順之助  
内山則男 木下賢二 岡島やよい 是洞三栄子 藤本泰世 金丸千尋 高良真木 半崎和枝  
横前明 奥村俊二 鈴木啓功 谷口時彦 後藤邦汎 鈴木春夫 高媛 川合継美 菅原三太郎  
立正佼成会神戸教会 久保和男 永井栄 山本義輝 崔鳳義 崔岩 篠田欽次 永原今朝男  
長野県自興会(法人会員) 清水薫 森田重夫 松岡満壽男 古賀勇一 (有)アンポサービス(法人  
会員) 萩原武太郎 川口憲 辻誠 富樫昭治 鈴木賢士 金子静子 山田弘子 田中久子  
鈴木俊作 (社)日中協会 新谷陽子 吉田敬子 野田良雄 長谷部照夫 長田末作 岡田久子  
田中信雄 衛藤瀋吉 渡邊亮介 出口三平 中村孝司 石田和久 可児力一郎 鳥島せい子  
窪田かつよ 木村直美 鍵山辰馬 成田晃一 遠藤勝男 吉岡稔 丸野公平 青木孝 荒川孝  
名越二荒之助 牧野史敬 北原汎 大類善啓 太刀川勝喜 三井汎 奥村正雄 山岸忠夫  
井出正一 新井仁 清水えい子 小林勝人 長江忠司 北澤吉三 塩野泰彦 寺沢秀文  
寺沢幸男 酒井誠 田中實 今村康雄 佐々木ハスゲレル 牛山満智子 西田八郎 松尾政司

### 書籍のご案内

方正友好交流の会が編集した2冊の本をご紹介します。

- \* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』 定価 1500 円  
この本には、日本人公墓の建立の軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されています。
- \* 『日本と中国 その底辺を翔けた70年』 石井貫一 編著 定価 2000 円  
再編前の会長であった石井貫一氏の中国国家友誼賞受賞を記念して刊行されたもの。方正に対する石井氏の熱い思いとその足跡、今後の指針などが綴られています。  
この2冊は当会が扱いますので払込振替用紙をご利用ください。

- \* 『天を恨み 地を呪いました —中国方正の日本人公墓を守った人々—』

奥村正雄 編著 定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」—ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っています。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話 043-272-9995 FAX 043-272-0214  
E-mail : k.beijing@mx5.ttcn.ne.jp )

- \* 『二つの祖国 ある中国残留孤児の証言』

北澤博史 著 定価 1500 円 (税別)

製作・発行 夢工房

著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様子や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を出しています。この著書については、直接下記の北澤さんに申し込んでください。

〒250-0001 神奈川県小田原市扇町 1-21-10 電話 0465-35-2531

## 編集後記

昨年 6 月再編総会を終え、会報を 9 月に発行してから、半年ほど経過したことになります。昨年方正を訪問した若い世代の原稿を掲載でき、なんとか 2 号目を発行することができました。その間、いろいろ新聞等で方正の公墓を紹介していただきました。当会の重要な目的の一つである、公墓の存在を多くの日本人に知っていただくという意味では活動の大きな成果とも言えますが、それ以上のことが出来たかといえば正直いって忸怩たるものがあります。しかし焦らず、小さい会なりに出来ることを着実にやっていたらと思っています。今後ともご支援ご協力をいただければ幸いです。

この会報はすべての会員はもとより、当会の活動に共感する方々にも開放していきたいと考えています。ぜひ原稿をお寄せください。 (大類)

『星火方正 (第 2 号) ~燎原の火は方正から~』

2006 年 3 月 1 日発行

第 2 版 4 月 7 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email : ohru@jcst.or.jp

東京都千代田区神田小川町 3-6 分住協会館 (社)日中科学技術文化センター内

〒101-0052

電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643

加入者名 方正友好交流の会